

中では一つの等価なものだというのは、一つの心理としてはあるのだけれども、逆に言えば、そういうものを身近な存在にするという役割を果たすのだけれども、そこで終わってしまっていると、怖い気がしますね。

伊藤 先程、受け手の方もきちんと発信された情報を選別していくように、勉強しなければならないというようなお話がありましたけれど、たとえば、大新聞と言われているなかでも、日本の新聞ほど社会面というか、いわゆる三面記事というのが充実している先進国は、あまりないですね。地方版に、人が殺されたとか、どうしたというのは、地方らしさが出ていますけど、それこそ、交通事故から児童虐待、なにからなにまで。まだそれぐらいしか起こっていないから、全国ネットでそのくらい報道すれば充分だというのがあってもいいかもしれない。アメリカなどでは、州ごとに毎日のように殺人が起こっているから、別個に分けなければいけないのかも知れないけれども、これもこの前、小出先生がおっしゃっていたのですけれども、日本の新聞から三面記事とテレビ欄とスポーツ欄をとったら、新聞を買う人はがくっと減るのではないかと。結局、そこしか読んでいないというのがほとんどではないか。実際もっと重要な国際問題みたいなものは、何も載ってないと。最近では、一面も二面も、政治の問題っても本当に政策の話ではなくて、誰が嘘ついたとか・・・。

谷 結局は、そのあと、政治が悪いのも国民が悪いからだということと一緒に、メディアが墮落しているのは、国民がそういうものを求めているからだということになってしまうのだけれど、私は常に逆説的に考えて、日本は平和な国だから、バイオレンスのいっぱいある漫画とか、ゲームとかがもてはやされると。みんな幸せだから不幸なメロドラマがウケると。みんな平凡としていて、事件だと事故だと、ワイドショーでスリルを求める、というふうと考えられて仕方ないのです。逆に真実が危機迫ってくると、ああいうものに逆行しなくなるのかなと、いう気はしますね。自分の身の回りで、凶悪な事件が起こって、あるいは被害者になったとき、そういうものをテレビで面白半分に行っているワイドショーなどは、おそらく見たくないと思うのですね。

倉田 あとは、やはり時間のかかることかもしれないけど、教育の問題というのは大きくて、やはりもう少し小さい頃から議論をしなくては。特に大学生と接していると、そういうことは強く感じます。去年、海外のワークショップにうちの大学院生を4人ほど連れて行ったのだけれども、ヨーロッパの連中とグループに分けて、作業するのだけれども、やはり議論についていけない。それは言葉だけの問題ではなくて、やはりそういう習慣ができていないというか、それはもう学生の中でもそういう気がするし、僕は結構、グループの中で作業をしたりしているのだけれども、普通の日本人は、そこで議論をしてまとめる、議論をして課題を進化させるとか、あまり上手じゃない。そういう意味では、もう少しそういう、議論というか、意見を戦わせようという機会をもうちょっと、それは大学だけに限らないかもしれないけど、家庭の中でもそうかもしれないけど、そういう機会が必要なのではないかなと思います。やはり、ある年齢になって急にそれをやれといっても、そうはできないし、やはりそれはすごく大事じゃなかった気はしますね。僕もまた、昔アメリカの大学院行っていたときに、土曜日に日本人学校の教師をしていて、向こうの学校に行っている子供達と接していたわけで、そうしたら、日本にいる子供たちと全然違って、そういうことにはやはり同じ日本人でも慣れると言ったのだけれども、逆にそれをコントロールするのが大変だったというのが経験としてあって。とにかく意見を言うわけですよ。ある意味では自己主張というふうにいえないけれども、それはもう日本から視察にきた先生達はびっくりするわけですね。そういう意味で、全然日本の学校と違う。たぶんそれはこう、教育のやり方が違うのかもしれないし、そういう機会があれば、街づくりなんかでもそうだと思うんです。学校教育の中に総合教育が出てきたので、その中でも少し、街づくりとかそんなことをしたらどうかというの、要は、頭が固くなっちゃった大人の人に街づくりの議論は話をしてもなかなか理解されないことが多くて、子供達だと柔軟であるので、環境問題など、問題意識はおそらく、そのくらいの子供たちの中で、子供なりに議論していくことの蓄積だと思う。それは大きいと思う。だから教育の問題と捉えれば、我々の直接関係する問題はなくなってしまうのかもしれないけど、少なくともそういう機会を増やしていかないとだめだろうという気がします。

谷 そのためには先生の教育も必要。

倉田 そうなってきましたね。

谷 いま、現実にもそういう動きがありますよ。高校の先生とかに街づくり教育をする。中学とか高校の先生に。

倉田 学校に民間の人を呼んで。

谷 校長先生とか。外から登用するって言う発想だろうと。そういう意味では、トータルな、色んな問題が生活にかかわってくるさまざまな問題が関連してくるので、そういう枠の中で身近な問題を扱えば、そしてそこに子供たちが参加する機会があれば、違うのではないかと。いきなり犯罪とかを対象にしてしまうと、あまり、身近なものではないし、結構日常的な活動とか起きていることの延長に存在しているものだから、そういう主観ができてくるのが変わってくるのではないかと。

伊藤 私、今までインタビューしてきた三人の先生方の話をうかがって、やはり一番、教育が重要な気がしてきたのです。けれど、色々な問題がありますけど、やはり、学校教育だけでなく、家庭教育も含めて、子供が自分の頭で考えて、意見を言えるようにすると。しかも自分の言った意見に責任を持てるように行動するという教育を子供のころからさせておけば。

倉田 それこそ、今のまちづくりの活動に参加しても、いま、参加しても議論にならないではないですか。結局、偉い先生がくると意見がそちらに引っ張られてしまうみたい。だけど、街づくりや防犯をやりましょうという事ではなくても、アメリカなどで100人の人を集めると、100こくらい違う意見が出てくる。そういうものの議論と言うのは、日本では駄目ですよ。結局自分の頭で考える教育を受けていないから、報道などに関しても、報道されたものをそのままに受けて、反応するしかない。自分の意見で考えて、責任を持って発言することを子供のころからやっていけば、報道の仕方とか、変なことに対して自分はおかしいと、若い人からやらなくなると、選別できるようになる。これが大人になってから犯罪に行くか行かないかのストレスの部分で、こっちに行かないような自分にすることが出来るとかいう風になってくるのではないかと。

谷 全く同感だと思うのが、西山先生は、人間より犯罪・災害を専門にしているのですが、人間の危機に対応する能力が落ちてきている。その最大の理由は教育ということもあるのですが、危機を回避して子供の時に育つ、親もそうだし、本人も危機を回避する。危機にわざわざ会いに行くことはないのですが、ある程度の危険はリスクをどうやったら回避できるかってシミュレーションしてこないと、もっと大きい危機になったとき対応が出来ない。危険予知が出来ない。危険予知が出来ないと危険に会いやすい、これがどんどん危険にしている。歩行者が安全に歩ける道とか、段差のない道とかも大切だけど、段差があっても歩けること、車が走っていても避けられる事が大切だって事ですね。そういう観点がスポって抜け落ちていて、教育のなかでも危ないことはさせない。先回りしてふさいじゃうって事をしている。親も含めて。

倉田 それに関連するかわかりませんが、今の子供達は体力も落ちているわけですし、それ自体、身体的な能力がすごく低下してきている。一人ひとりの問題としては危機に対して、身体的にも遭う確率が高くなる。例えば骨が折れやすいとか。

伊藤 藤野先生がおっしゃった、昔は台風が来たら瓦が飛んだり、窓が飛んだりしたので皆で釘を打ったり養生をやったと。今はそう言う技術が進歩して、台風なんかで、家が壊れたりなんかはしないと、地震なんかでもめったに壊れないから、地震に対してあまり怖くない。もう技術が進歩していると思って、ところが先生の所にくる、外国人の学生さんとか、家族を持っている人を見るとやっぱり、地震が起こった時に自分の家族が大丈夫かとまず考えるらしいのです。それによってこんな所に住みたくないとか、大学の近くがいいとか。何があってもすぐに行けるというように、常に最悪のことを考えて全て行動している。日本人がそう言うのは全然無くなって、今おっしゃった様に危機を回避してとか、インフラでも赤信号を青になったら渡って良いて教わっているから、外国人などは赤でも自分で判断して渡りますから、日本人は赤だったら絶対渡ったらいけないし、青になったら良いですよといわれて、はねられてしまったり、こういう教育も含めて、まあ文明の発達とか教育の変化だったりとかによって、自分で考えたり判断したりする能力が退化しているのでは。

倉田 僕もそう思います。いわゆる教育と言いましたが、教育って事だけでは無くしてすごく小さい時から、社会参加する機会を増やすべきだろうと。すごく少ない、そういう意味で昔、我々よりさらに今の子どもたちの世代より上の人達が社会参加する機会が多かったのでは。

谷 完全な横社会ですからね。同年代の人間としか付き合っていない。

倉田 遊びひとつにしても地域で遊んでいると、兄さんたちがいて弟たちがいて、そういう関係があり、そういう中で教えてもらったわけじゃないですか。やっているうちに近所のおじさんに怒られたり。そう

いうちに社会参加、起きている様々な問題、高齢化社会問題とかその社会的弱者、バリアフリーの話にしても、子供のころに教室で教えるというより、社会の中でちょっとした事を体験すれば、彼らにとってその大切さが分かるんだと思うんです。だから、そういう事が欠けているように思う。それなら学校内でやっていけばいい、家族の中でやっていけばいいと。そういうことがあまり無い。

谷 兄弟がいなくなっちゃったから、家の中でも上下関係が無いし、同学年の人としか。弟とか兄さんが学校にいれば縦の繋がりが出てくるでしょう。今は全く無い、同級生の子しか遊ばない。だから大学生達なども見ていて、本当に縦の繋がりが無い、次の年代なんかもう全然顔も知らない。

倉田 そうですね。もうずいぶん違いますね。そういう人の関係が。

伊藤 いまでは学生は、先輩後輩っていう関係はいやがるらしいですね。ひとつ年齢が上でも「さん」づけしなきゃいけないとか、そういうのが。そんな事するくらいだったら付き合わないと言う人がいるみたいです。

倉田 そうですね。本当にそういう意味では、社会参加する機会が無かっただけに、人との接し方とかを知らないというか、どんどんそうなっていると思う。だからそれは多分、少子化とかそういう傾向は、大きな傾向として、そこを変える事は出来ないかもしれないけれど、それだけに余計今度は、意識的に社会参加の機会というのを小さいころから増やしていかないと、昔だったら放っておいても、自然とそういう機会というのが出来てきたのだけれども、気がついてみればやはり、少子化とかそういう中で逆に放っておくと、そういう機会がどんどん失われていく傾向にあるわけだから、社会側も意識的にそういう機会を増やしていかなければ。学校教育などを通してよいのだけれど、地域の色々な活動に子供達が参加するとか、そういう中ではじめて様々な社会の問題に実感を持つことが出来るのなら、とにかく、人とのコミュニケーションをする力がついてくるのではないかなと思うのです。

伊藤 80分間もありがとうございました。